

超次元ゲームネプ
テューヌmk2 —もう—
人の協力者—

らい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突然白い世界に呼ばれた沖中宏樹。

彼は、超次元ゲームネプテューヌmk2の世界で生きていくことになった。

さて、彼はどのように生きていくのだろうか。

※題名こそ同じですが、前に「にじファン」で掲載していたものとはありませ
ん。

目次

プロローグ	1
第一話 ネプテューヌの世界へ！	5
第二話 ギルド	11

プロローグ

「さてと、だ」

俺こと沖中宏樹はそんなことを言いながら俺は辺りを見渡す。

見渡したんだが……。

「見渡す限りの白い空間……か」

何か、神様とか出てきそうな雰囲気のある状況だな。

呼ばれて飛び出てジャジャジャーン、とか。

『これこれ、ワシはそのようには出ぬぞ』

突然、そのような声が俺の頭の中に響く。

まあ、大体予想はしていたが。

予想ついでに、ちよつと色々とやっておこうかねえ。

「だ、誰だ！曲者か!？」

『ノリノリじゃな。まあ、大方予想しているようじゃが、ワシは神じゃ』

やっぱり神様だったんですかい。

で、ここつてどこなんだろう？とか考えてみる。

『ここは、言わば魂の選別所といったところじゃよ』

うおつ、声に出してないのに返事が返ってきた。

まあ、神様なら仕方がない。

『むう、何やら珍しい思考の持ち主のようじゃな』

「と言うことは、まさか転生させてもらえるとか言うことは…?」

『まあ、そのまさかじゃ』

転生キタ——（。▽。）——!!!

「でも、何で?」

『まあ、お主が今ここにいて、ということがイレギュラーだということだけ言っておこう』

「ま、まさか、本当は今死ぬ予定じゃなかったとか言いませんよねえ?」

『む…そのまさかじゃ』

神様はちよつとだけ言葉に詰まったようだった。

まあ、あまり深く掘り下げないようにはしておこうかねえ。

『で、じゃ。転生するに当たり、お主に力を与えようと思う。何がよいかの?』

むう、ここは手堅く武装神姫の力だろうなあ。

この作者、神姫スキーだし。

他には…剣技の才と銃撃の才かな。

あとは…適当に、かな。

「決まった。まず、武装神姫のアーマー、機能を全部」

『全部は無茶じゃ。まあ、3つか4つあたりにしておけ』

そう言われても、全部好きだから結構悩むんだよなあ。

「じゃあ、アーンヴアル、ヴェルヴィエッタ、アーク、ストラーフで。ついでに、それぞれの性格での人工知能つき」

『まあ、しょうがないのう』

「それと、剣と銃の扱いをレベルMAXで」

『心得た』

「あと、武装としてTA23、25、27、29の武器や能力をできるようにしてくれ」

『わか…ってちよつとまて!』

ちっ、気付いたか。

割と本気で使いたかったんだけどな。

『宇宙戦艦の武装を使えるわけがないだろうが!』

「そつち!? だったら、名前そのままで同じような機能で良いや」

『ならば、了解じゃ。で、お主の行く世界じゃが…』

「ああ、それは決めてあるさ。超次元ゲームネプテューヌmk2の世界だ！」

『ネプテューヌの世界じゃな。まあ、新作もそろそろ出そうじゃが…』

「良いんだよ、うまくやればそのままそっちにもリンクできるしな」

『了解した』

「それと、行く時代は女神達がマジエコンヌ討伐に行くちよつと前の時間軸で」

『注文が多いの。後はないか？』

「大丈夫だ、問題ない」

俺がそう言うと、段々と辺りの景色がぼやけだした。

そろそろ送ってくれるのだろう。

『では、そろそろお別れじゃ』

「サンキュー、神様。色々ありがとうな」

『うむ、それではよき旅を』

その言葉を最後に、視界が暗転した。

さて、次に目を開いた時には、ネプテューヌの世界か。

俺は、期待に胸を膨らませながら、到着を待った。

…SAVE

第一話 ネプテューヌの世界へ！

「なんだこりやあつ！」

俺はそう言いながら、地面へ向けて自由落下をしている。

この世界に来た場所が空中だったってだけで、何もおかしなことはない。

とはいえ…。

「このまま落ちれば死んじまうよな、普通」

この世界に来てそのまま死亡とか、目も当てられん。

ってか、そんなことが許されようか、いや断じて。

そんなことを思いながらも着々と落下を続けているわけで。

で、当然ながら地面も近づいてきている。

流石にまずいと、回避策を練っていると。

「グオオオオツ!!」

下から何か雄叫びのような声（というよりも威嚇か）が聞こえてきた。

声の発生源を探そうとしていると、モンスター怪獣に今にも襲われようとしている一団の姿が目

に入った。

4—5人で相手をしているようだが、流星にモンスターが相手では不足のようだった。

「このまま見放したんじゃ、寝覚めが悪いわな」

とはいえ、俺も自由落下している身だしなあ。

そう思っていると、懐に装着された銃が光りだし、声が聞こえてきた。

『私を呼んで下さい、マスター!』

どこかで聞いたことのある声だった。

そして、その声の主を理解した俺は、空に向け銃撃を放つ。

力ある言葉と一緒^{呪文}に。

「来い!アーンヴァル!」

弾丸が空中ではじけ、白い魔法陣を作り出す。

そしてそこから白い機体が姿を現す。

所謂、ラファール形態のアーンヴァルだ。

姿を現したアーンヴァルは、俺の方へ一直線に向かってきた。

「ぶつかる!」と思った瞬間、アーンヴァルはそれぞれのパーツに分離し、俺の体に装備されていった。

胸部アーマー、四肢のガード、背中のバックパック、それに申し訳程度の頭部アーマー

マー。

元々俺のために作られたかのような感覚だった。

そして自由落下していた俺の体は空中に浮遊するかのようにその場に浮いていた。

「アーンヴァル、行き成りだがあいづらを助ける。力を貸してくれ」

そう言い、先ほどの一団の方を見る。

彼らは今にも襲われようとしていた。

すぐにでも動かないとヤバいか？

『了解です。得物はどうされますか？』

得物って…。

彼らを巻き込むわけにはいかないから、普通に考えて剣だろうな。

そう思い、「剣を頼む」と呟く。

すると、右足の装甲が開き、剣の柄のようなものが現れる。

『それを使ってください』

アーンヴァルが言うままその剣の柄を握り、剣を構える。

構えた瞬間ブオンツと音がし、光で剣が形作られた。

所謂、ライトセイバーという奴である。

「じゃ、行くぜっ！」

そう言う俺は背部のスラスターを吹かし、モンスターの方へ突っ込んでいった。

side
???

「くそ、何でこんな場所にこのモンスターが!」

俺は剣を構えながらそう口走る。

今までは、この場所にはこんなモンスターはいなかったはずだ。

少なくとも先週くらいまでは。

それに…。

そう思いながら自分の後ろに目を向ける。

そこには、顔を蒼白にした新人ハンター達の顔があった。

俺一人なら逃げることも出来るが…まさか、こいつ等を置いて逃げるわけには行かないしな。

参ったぜ。

「ガアアアアアツ!」

目の前のアラガミはそんなことも構いなしに俺たちに威嚇をしてきている。

こんな奴の攻撃を食らったら、それこそ一巻の終わりだからな。

そう思い、チャキツと剣を握りなおす。

せめて、こいつ等だけでも逃がさないと。

そんな時だった。

「でやあああつー！」

そんな声がかから聞こえてきた。

その次の瞬間、ズシヤツという音がし、目の前に居たアラガミは両断されていた。

side ???
END

「ふう、危機一髪ってトコだな」

そう言つて、俺は剣を構えている男に声を掛けた。

男は「え……」と言いながら、モンスターと俺を交互に見ていた。

そして、危機が去ったことが分かると、持っていた剣を地面に突き立て、ドスンと腰を下ろす。

「助かった……のか？」

「ああ、多分な」

男の呟きに俺はそう答える。

まあ、腰が抜けたつて言葉がびったり来る状況だな。

そう思いながら、男に手を差し伸べる。

男は、「ありがとう」と言いながらその手を取って、どうにか立ち上がることが出来た。

「俺は天宮リント。今回は助かった。アンタは？」

そう言って、彼はこちらに手を伸ばしてきた。

やべ、そういうえばこつちでの名前を考えてなかったな。

武装神姫を使ってるから『コナミ』って名前か？

…いや、もしほかに同じ名前の奴がいたら面倒だからな。

『ケイス』ってのはどうだ？

うん、意外に良いかもな。

「俺はケイス。冒険家だ」

こうして俺ことケイスはネプテューヌこの世界にデビユ誕生した。

まあ、華々しくもなんともなかったけどな。

…SAVE

第二話 ギルド

「へえ、つて言うことは、君達はギルドメンバーつて言うことなのか」

俺はそう言つて驚きの声を漏らす。

見たところ、戦闘経験があまりなさそうな奴しかいなかったしね、リント君以外は。

ま、新人の教育係なんじゃないのかな、なんて想像を試してみる。

「まあ、こいつ等はまだヒヨッコですけどね」

リント君はそう言いながら俺たちの後を付いてくる新人君たちを指差す。

当の本人達は、「リントさん、ヒデエなあ」などと言いながら、俺たちの後を追うように付いてきていた。

…なるほど、信頼関係はよさそうだな、このパーティー。

「そういえばケイスさん。何であんなところに？」

新人君の一人が、俺にそう問いかけてきた。

彼の名前は聞いていないから、今はA君とでもしておこう。

「あー、気が付いたら空から落ちてる最中だった」

うん、嘘は言つてない。

願わくば、あまり追求しないでほしいなあ、と思うことしきりが、そんな願いも空しく。

「モンスターか何かに投げられたってことっすか!？」

…ああ、そう解釈してくれたのね。

リント君たちと色々話しながら歩いていると、目的の街のめと鼻の先に来ている。そこは黒の建物が犇めきあっている街だった。

リント君に確認すると、そこはラステイションという街とのことだった。

…って、ラステイション!？」

俺が街の入り口で呆然としていると。

「ケイスカーン、早く行きますよー!」

そんなリント君の声が聞こえてきた。

見れば、リント君たちと俺の間はすでに50メートルほど開いてしまっていた。

「おお、すまねえ!」

俺はそう言うと、リント君たちに追いつくべく駆け出した。

そして俺たちは、リント君達のギルドが拠点としている酒場へ歩を進めるのだった。

「では、出会いを祝して。乾杯！」

それぞれに飲み物が行き渡ったところで、全員でその声を掛けながら杯を交わした。キンツと小気味良い音を立てたあと、それぞれの飲み物で喉を潤した。

その後、俺達の座っている席に様々な料理が並び、胃袋をそれらで満たしていった。食事も終わりに差し掛かった頃。

リント君が話を切り出した。

「ケイスさん、よかつたらだけど、うちのギルドに入りませんか？」

この世界で身寄りのない俺には、嬉しい申し出だった。

が、まだ今の能力をフルに使っていないから、もう少しソロでいて修行するという考えもある。

結局のところ、基本的にはソロでいることを選択させてもらい、たまに一緒に狩りを行うというスタンスにさせてもらった。

加えて、明日仕事の結果を報告しに教会へ行く、ということだったので同行させてもらうことにした。

次の日の昼頃、リント君と俺は教会へ向かった。

教会に着き、重い扉をギギギツと開ける。

するとそこには。

「やあ、待っていたよ。それと、知らない顔が一緒にあるようだけど」
その声に導かれ、俺達は教会の中へ入っていった。

∴SAVE